

討 論

(後藤) これから村研の第二回研究会を開かせて頂きます。それで共通課題について島崎さんの提案と東北での研究会をふまえて話し合いを進めて参りたいと思いますが、最初に論点整理を余田先生にお願いいたします。

(余田) 今年のテーマは考えてみますと実にむずかしい。どういふ風に考えてよいのか、どうもよくわかりません。それで結局、問題をはじめに戻して島崎さんが九九号でいっておられることを分析してみることにしました。まず、島崎さんがどういう趣旨で農民の「生活破壊」といったことを提案されたのかということを見て行きます。それによれば、これまで「日本資本主義と家」というテーマで二年間討論してきたけれども、資本主義の問題が正面にすえられ

「家」が具体的に双方の関係として把握されて行かなかった。そこで「資本主義と家」の問題関心を持続しながら、もう少しテーマを具体化したらどうかということになり、会員や運営委員・宿題委員からいくつかの提案がなされたが、そこからなかなか具体化の方向をしぼり切れなかったもので、島崎さんは「いっそ」、この「いっそ」ということに変意味があると思うんですが、「いっそ、ここで農民の「生活破壊」の状況をとりあげ、農民の「生活」論がしばしば説かれる問題の所在を具体的に検討してみてもどうか」という提案をされたんです。しかし、ここでいう農民の「生活破壊」という意味がわからない。これは簡単に考えてみればわかるんですが、それじゃあこの学会で問題にしようという場合、なかなか難しい問題だと思えます。そこでこのことを島崎さんはどのように考え、それをどのようにみて行こうとしているのかといえ、

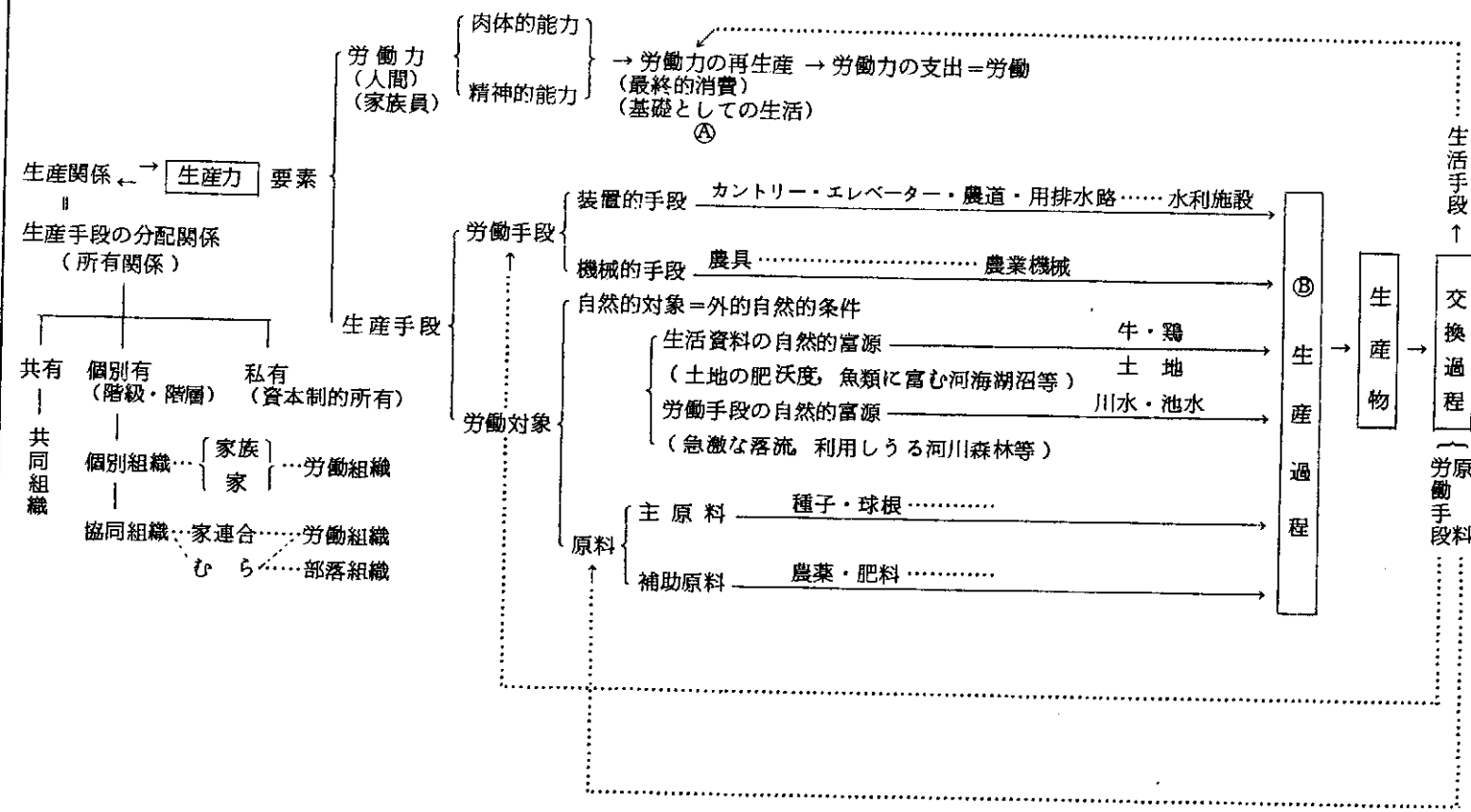
「高度成長」の過程に広汎に進んだ農民の生活破壊の現実から出発し、

1. 破壊される以前の「農民生活」とは何だったのか。
 2. 農民の伝統的な生活の枠組みとは何だったのか。
 3. それを破壊する力と破壊される側の農民との関係のなかで生活破壊の真相をつかんで行く。
 4. 現に生活破壊が進むにもかかわらず、よくいわれる生活擁護の闘いが何故広汎な農民をとらえないか。
 5. 「生活を守る」とは一体農民にとって何なのか。
- という「一連の問題が農民・農村の現状分析と生活史研究として問

われていいと思う」といわれるわけです。

そこで、ここでいう「生活」とは何かということになりますが、鳥崎さんは「小生産者の場合、原理的には、労働者のように(「労賃」範疇の確立)、生産と別に消費生活が明確に分化してこない」といわれておることからわかるように、「生活」とは、生産と生活との未分化の状態をさしていると思われる。そのように「生活」の意味を規定した上で、「生活破壊」ということになれば、それは、生産と消費生活との分離ということになる。あるいは、生産と消費生活とが、ともに消滅するとか、生産がなくなり、消費生活のみとなる、ということもありましょう。また形式論理的に言えば、消費生活がなくなり、生産のみとなる、ということもあります。もちろん、こうなれば人間は死んでしまうわけだから、これは実際にはありません。そこで、「生活破壊」とは結局、生産と消費生活との分離ということで見ると、これをどのような局面で論ずるかということになりましたが、これはもう、すでに指定があるわけで「農民層分解の現状のなかで」ということになりました。その場合にはつきりすべきこととして指摘されているのは、「小生産の生産力破壊の意味をもって深刻化している問題点」ということであり、小生産者の生産力破壊という意味をもつ「生活破壊」を明らかにすることが共通のテーマであるということになる。そこでまず調査で具体的に考えるためには、生産力とは何かという点を明確にしなければならぬし、つぎに、生産力破壊が、生産と消費生活との分離にどのように関連しているかが問題です。そこで生産力破壊というときの生

産力とは何かという初歩的なことを復習してみましよう。なお、そのさい生産力破壊という意味を持たない生活破壊とはどういうことかということも論理的にはありましようが、それは問題からはずして取扱わないことにします。そこで四頁の図をごらん下さい。それで生産力破壊というのは要するにこの要素の破壊ということになります。簡単に言えば労働力の破壊、人間の破壊ということになります。また、生産手段の破壊ということは、具体的には図にあげたようなものの破壊になるわけです。こうしたものが結合するのが生産過程であります。生産力は具体的にはこの生産過程で発揮されるわけですから、生産力の破壊というのはこの生産過程の破壊ということまで含まれます。さきほどの「生活破壊」ということは、これで見えますと、㊸と㊹との分離、あるいは㊺もしくは双方の消滅ということになります。それをもう一寸具体化すると、生産力というものは生産関係の中で動いているわけですが、生産力の破壊を通して生活が破壊されるという場合、生産関係の破壊ということにまで結局のところなつてきます。その場合に生産関係の破壊ということに関連して行きますと、その生産関係というものが一体どういふものかあらかじめ考えておく必要があります。それは非常に大雑把に言えば、共有と個別有、そして、私有を基礎とする資本制的所有があります。そして、それらには各種のレベルでの労働組織の働きかけがあるわけですから、そういうものの破壊も考えなければなりません。だから生活破壊というものを非常に拡大して理解してまいりますと、単なる生産力の要素がそれぞれ破壊されるということでは



④ + ③ = 小生産者の生活, 生活破壊 = $\left\langle \begin{matrix} \textcircled{B} \\ \textcircled{A} \end{matrix} \right\rangle$ 分離あるいは $\left\{ \begin{matrix} \textcircled{B} \\ \textcircled{A} \end{matrix} \right\}$ 双方の消滅

はなくして、それを通じて生産関係の破壊ということにまで入って来ます。こういう風に考えて行くと、「生活破壊」ということは、こういう局面において議論して行くことになるんじゃないかと思えます。鳥崎さんの提案に戻りますと、現状分析の立場から大まかな柱を立てるとして、第一に生産力破壊と分解の促進です。ここには資本による農業破壊、あるいは生産破壊ということがあり、それによって分解が歪んだ形で進行しているということがいわれています。第二には伝統的生活枠組みの解体、第三には「生活破壊」の裏相です。こうした道筋のうえに具体的な農民の「生活破壊」の裏相の例があげられているわけです。

つぎに鳥崎さんのいっておられるもう一つの論点ですが、それはどういう目標でこうした議論をやっておられるかということですが、鳥崎さんは、「課題の発発は、「村は生きている」という発見、回想にあるのではなくて、破壊の現実になつて何が斗いとられなければならぬかということである」といっています。そして、農村自治論とか社会主義下でのコルホーズや人民公社の問題とか政策立案能力とかが問題になるということですが、そこには現状変革への願いが最大の願いとして含まれていると思えます。そのことは鳥崎さんだけでなく、一〇〇号にのっている安原さん、雪江さんも違った表現ではありますが、やはりこのことを述べておられます。安原さんは「生活破壊の実態認識」として、その場合、「破壊」というのは弁証法的に理解する必要があり、「破壊」されつつもそこに新たな展開の問題もあわせ考えねばならぬといったことをいわれていますが、

あとでその意味を御説明願います。また、雪江氏は、①現代社会の基本的価値法則の論理構造を明らかにする、②そこに示されている生活法則と生活の論理をうきばりにする、そして、この両者の今日的相剋関係を明らかにすること、両者の矛盾的關係を解消するための具体的方策を提示することが必要であるといわれています。いずれも、このテーマで追求すべき目標を述べているわけで、一言にしていえば、現状変革への政策立案ということになると思います。そうならば、この目標に向って論ずべき基本的論点は、

1. 農民にとっての「生活破壊」とは何か。

破壊される以前の「農民生活」とは何だったのか。

破壊に対するスタンダードな農民生活像の把握。

農民の伝統的な生活の枠組みとは何だったのか。

2. 何が「生活破壊」をもたらしたか。

3. この現実に対して農民はどのように対応しているか。

4. 何が斗いとられなければならないか。

5. 政策の立案。

となるわけで、このような議論にもって行ってくれという御提案ではないかと思えます。以上、提案者のいっておられることを私は分析的に整理してみたわけで、これにはいろいろな御意見もあると思えますが、これに対して東北での研究会における議論は少し違うのではないかと思います。こういうことをめぐって、あと御出席の方々に討論をして頂きたいと思えます。

(後藤) いま鳥崎さんの提案について非常に基礎的なところまで

掘り下げて分析して論点を出して頂いたんですが、ここで岩本さんから三月一二日の合同委員会でのような話しが行なわれたのかということを出して頂いてから討議に移りたいと思います。

(岩本) 御承知の通り昨年の大会で今年の共通課題が決まらなかったわけで、その後、島崎さんの御提案を頂いて東北で研究会をやりました。それでまあ一応そこで出た案として一〇〇号でお知らせしたようなテーマではどうかということにしたいんですが、もちろんこれは運営委員会や宿題委員会で最終決定して頂く必要があったんです。三月一二日に東京で開かれた合同委員会で「村落生活の変化と現状——農民にとつての『生活破壊』とは何か——」ということに正式に決定して頂きました。とにかく現代の問題に主眼をおいて考察しようということです。この間、いろんな意見が出たんですが、そうしたものを安孫子さんに共通課題設定の趣旨としてまとめて頂きましたので、ここで読ませて頂きます。

「すでに『研究通信』第九九・一〇〇号と二度にわたって掲載してきたように、この共通課題は、昨年までの「日本資本主義と家」というテーマを発展させて、現代日本の村における『生活破壊』の状況に焦点をあてて、そこから現在の村・家の本質的状况を把握しようという意図から生じてきた。それは、昨年度の大会討議では、具体的な家と日本資本主義の相互規定性が煮つめられなかったという反省から出ていると同時に、他面では、現在の農山漁村における『生活』の著しい変貌、破壊的状况を、本質的にどうみたらいいか、という問題意識から出てきたものである。

こうした状況については、従来から、農家経済解体、農業解体、あるいは『自然破壊』といった概念で把握されてきたし、また過疎化、都市化といった社会関係の変化として論じられてきた。しかし、これらの概念だけでは、村落の社会関係の本質的变化を把握するのに、余りに基礎的すぎたり、あるいは余りに現象的すぎたりして、必ずしも充分には把握し切れないものがあつた。さらにまた、村落に生活する人々の展望を考えると、その考察の立脚点が必ずしも確固たるものになつていなかったと考えられる。村の現実はあるがままにみても、そのまま肯定できる状況といえないであろう。そのため、多くの提言がなされているわけであるが、それが一面的あるいは対症療法的に墮さないためにも、村や家の生活解体についての深い現象認識がまず必要であると思う。

いうまでもなく、村落社会における家は、本質的には、『生産』と『生活』との分ちがたい統一体である。それゆえ、生活構造の変化、ないし、その『破壊』的状况を把握することは、ただちに生産・経営、あるいは産業としての農林漁業、労働市場等の動向と関連してやることになる。それゆえ、このテーマは、多くの会員の研究テーマと深く関連し合っており、実態把握の論議もかみ合うものになると考えられる。

以上のような趣旨から、まったくの叩き台として、問題を幾つか指摘しておこう。

一、生活実態の把握——村々における『生活破壊』的状况は、高度成長とその行きつまりのなかで、激しく進行したとみられる

が、にもかかわらず“生活破壊”の内容・本質は、必ずしも明確なものではない。そこでまず、生活変化の多様な実態を示しながら、変化の実態のなから、なにがどのような意味で“生活破壊”であるかが、論議されなければならないだろう。生活実態の一面を鋭く切りとりながら、広い視点で、その意味を明らかにして行きたい。

二、所得・兼業構造と“生活破壊”——村における“生活破壊”は、単なる窮乏一般ではないであろう。そこには、農林漁業と兼業との関係、したがって所得構造の問題が必然的からんでくる。兼業所得を加えて生産費をまかないうれば、“生活破壊”といえないのかどうか。それを村落における家の問題として、どう本質的に把握すればいいかが問題であろう。ここでは労働市場や農民層分解の状況が関連してくるであろう。

三、生産力構造と“生活破壊”——生活構造の基礎には、生産力の問題があるが、高度成長期の農業生産力は、労働生産性の向上が至上命令とされ、専作（単作）化され、機械化が進んできた。そして、これが、兼業化とも結びついたのであるが、農業におけるそうした生産力構造は、農漁民生活にどのような変化をもたらしたのか、が問題である。ここでは家族労働力の就業動向、経営収支構造と関連づけながら、生産力の問題をとらえたい。

四、村落構造と“生活破壊”——上述の変化は、必然的に村の構造（家連合・家関係）を変化させ、旧来の地域のまとまり、家

の協力組織が崩れ、変って地方自治体の問題をクローズ・アップさせてきた。形態的にいえば、過疎化・都市化の問題を始め、単に生産上の組織の変化だけでなく、生活面での諸関係をも変化、解体させてきている。村仕事・村行事の変化もある。こうした変化と家生活との関係、さらに農山漁村自治体の意義が明らかにされる必要があるだろう。

五、家族関係と“生活破壊”——就業構造・生産力構造の変化は、家族関係をも変化させるが、「家業」・「家産」的な側面をもつ村の家において、相続・ライフサイクルの変化は何を意味するか、が問題であろう。“あとつぎ”問題に代表されるように、家族の問題も重要な契機と思われる。

六、伝統的枠組み解体の意義——これらの諸局面を全体としてみれば、村落生活の変化の歴史的過程を、現時点で本質的に把握しようということにはならない。本テーマは、素材を現状分析に求めることだけに限定していいない。歴史的過程を明らかにすることも重要であり、その意義を現時点について考察して、展望につなげたいと考えるのである。そこには、村人の主体的な運動の局面もかわってくるであろう。

以上、思いつくままに問題点を例示したが、多面的なアプローチを通して、農山漁民にとって、“生活破壊”の本質はなにか、その要因はなにか、を明らかにして行きたい。そこから、展望を考えるための立脚点が表示されれば、この課題を設定した趣意は達せられるといえよう。

これが安孫子さんが合同委員会での様子をまとめて下さったものですが、実は必ずしもこうすっきりした形で議論が展開されたわけではなく、もっというんな意見があったわけで、おそらくそこに出席された方々からもこうしたまとめ方に異論があるかも知れませんが、しかし、それほど今回のテーマは、いざ議論するとまとめにくいということだと思えます。なお、私もその場におりましたので、少し具体的なことを補足しておきましょう。主な意見として、提案者である島崎さんは、「生活破壊」というのは、ずばり公害問題なら公害問題が起っているそのこと自体をおさえて行こうというきわめて積極的な姿勢を示しておられます。これは島崎さんが最近ずっと「研究通信」に書いておられた一連のものを通しておわかり頂けると思えます。また中野卓さんは、「生活破壊」の問題をやるのは非常に結構であると前置きしながら、「生活破壊」というのは要するに生命破壊・健康破壊の問題として自分は受けとるが、そうなるエコロジの問題になるわけで、そうした生命にかかわる問題をやるべきに今の村研のメンバーで果してこなし切れるのかということを書いておられました。それから生産力の発展、たとえば戦後稲作における反当収量の増大、機械化の推進による省力化といった問題をどのようにとらえるかということで、いろいろな意見が出ました。一つは生産力の発展をプラスの問題としておさえるという見解ですし、もう一つは現象的に生産力が伸び、省力化が進んだとしても、それが結果として農民生活を「破壊」させることになっているんだから、生産力発展はやはり「生活破壊」の問題としてとらえるべき

だという考えです。島崎さんはまさにこの後者のような考えです。ただ、そうした場合、島崎さんは「資本による農業破壊は誰の目にもおおいがたい」といわれるけれども、その「誰の目にも」というなかに果して日本全体の農民が入っているのだろうかという気がしてならないんです。たしかに公害問題なんか表面化しているところでは、農民がそうしたことをはっきり意識しているかも知れないけれども、農民全般の意識にそれがあのかとなると、私は否定的です。島崎さんはここにいきなり農民の意識ということを持ち込んで駄目だといわれましたが、それならそれで農民にそれをどのように意識させるかが重要だと思えます。東北の、とくに山形なんかのように反当収量のどんどんあがって来ているような農村に行った場合、もちろんその人たちにもいろんな不満はありますけど、現状に不満といっても島崎さんの提案のような意味での「生活破壊」といういい方は受け入れられないでしょう。しかし、だからといって、そうした農民は意識が低いといって片付けられるべき性質のものじゃあないと思えます。そこで私のまったくの思いつきなんです、戦後の生産力の発展というのは、エコロジカルなことをば使えば、人間の生物としての個体維持本能にもとづく側面からみれば、生活水準の向上といったことを現出させたということもあってプラスの評価ができるのかも知れないが、もつと長期的にみて種族維持という立場からみると、生産力発展の結果が次の世代、あるいはもつとずつと後の世代というものに対して非常に悪い影響を持つてくるとすれば、これはやはり「生活破壊」の問題としてとらえんとり

あげて行かねばならないと考えます。ただ、そうした生態学的手法をとりこんでやるのは、私なんかその素地がないから困難です。それでは、安原さんがおいでになつてゐるんで、なお東京での様子をお話し願つたらと思ひます。

(安原) たしかに東京での議論は安孫子さんのまとめられたようにすつきりしたものになつていゝなかつたことは事実です。重複するかも知れませんが、簡単にお話しします。それであつた今度の課題には二つの面であるんで、一つはいままでの「日本資本主義と家」ということの継続ということ、昨年の共通課題の報告においても労働市場の問題とか、生産力構造の問題とかという面から家のあり方が變つて来ているということまでは議論が行つたわけですが、そのなかで現実の農民の家あるいはその家の内部の構造、家族といひますか家族関係といひますか、あるいは家族のメンバーの位置、あるいは家父長的な家族協業のあり方のような問題とか、そういう内部に立ち入つてそれぞれがどういふように變つて来て、どういふ問題があるのか、たとえば主婦労働、主婦のあり方といったようなものはどうなつてゐるのか、むしろある意味では新しい状況のなかで、主婦労働が強化されるという現状もあるけれども、そういうことをどう理解するかということも議論に出かかつて終つてしまつたんです。そういう意味で、農民生活を具体的に今日の場面とらえてみればどうなるかという問題が残つたので、これをやはり議論する必要があると思ひます。「生活破壊」といふ問題が出された場合、そういうことも含めて考えてみる事ができるんじゃないでし

ようか。その面での継続という意味があります。これに対し、もう一つの新しく出されて来た面というのは何かということになります。が、実はこのことがあまりはつきりしないんです。これこれこうであるという現状認識から出発してこうである。だから「生活破壊」と取り組まねばならないという視点は必ずしもはつきりしなかつたんで、それをどう考えるべきかということも東京では話題になりました。しかし、そこんところはどうもまだまだはつきりしないんですが、実際には環境破壊とか、高度成長のいろんな意味での現われ方が生活面でも出て来ているわけで、それに対する反省といつたことも政府の方からもいわれてゐるし、それを農村の方からみて行けばどうなるのであろうかということ、いろんな職業見直し論のようなものもあるようですけど、そういうものを含めて現在の農業の意味といつたものを考えてみるとすれば、やはりそれを「破壊」といふ側面と関連させて考え、そうした「破壊」の実態のなかから何か新しい方策・展望といつたものが出て来るのかどうかということ、今考える必要があるんじゃないでしょうか。ある意味では高度成長の一つの帰結、そのもつ矛盾といふものを「破壊」といふ視点でみて行くことに、ポジティブな意味がありはしないかと考えてゐるんです。それで私が実は簡単にハガキで述べた意見が一〇〇号にのつてゐるんですが、あのなかでいつてるスタンダードな生活像が何なのかということが東京では問題にされました、スタンダードというのはあまりにもいい加減じゃないかといういい方もされ、何を考へてゐるんだともいわれました。そこでごく補足的に私の考えをいいま

すと、一つは戦後の農地改革で生み出された自作農の生活における所有と経営の一体化、その自作農的土地所有、これは適切な表現かどうか問題はありますが、とにかくそうしたものを基礎とした農民の性格をきちんとおさえておくためにスタンダードなものを考えてみるということです。当然、その場合、農地改革ですぐ従来の生活環境、村落慣行というのが崩れませんが、むしろある意味では地主制とからんでいて明確に出て来なかったいろいろな村の慣行のようなものが戦後の自作農相互の社会関係・村落関係のなかで現われてきたということもあります。そういうものを含めて、スタンダードな農民生活を考えていくということです。もう一つは「生活破壊」ということに関連して兼業が急激に進んで行く状況のもので、現在ではむしろ兼業化が一般的な動向で新しい機械なんかが入って来まして、兼業でも十分ある程度の生産を維持することができるといふわけで、そうなるとう兼業化構造というのは「破壊」というようにみるべきなのか、あるいは現在の資本主義のなかではそれが正常なものとして資本主義によって再生産されているとみるべきなのか、というように考えてみますと、今度のセンサスでも専業農家の比重がずっと減って来ている、あるいは農業専業者を持っている農家がどれぐらいあるかという資料もあるわけですが、そういう農家はむしろ現在どういう風にも見るべきなのか、そういう意味で正常なスタンダードなというのは、体制によって生み出され規定されるということもありはしないかということです。もしそういうものをスタンダードという風に考えると、「破壊」というものを考えるとき

とはかなり違ったものがありはしないかということです。第三番目は専業農家、つまり農民として生活しているケースですが、これが農民として最も望ましい姿であるというとき、プラス・アルファや副業経営といったものが新しく考えられていたり、あるいはいろいろな挫折的な試みをしているわけですが、共同栽培・集団栽培といったものも行なわれているわけで、そうした専業農家の経営構造も問題になると思いますが、とくに将来における展望を考えるとき、現状のなかから望ましいというようなものを、たとえば共同化なら共同化しないのだということをしてよいのだろうかということ、スタンダードなものとして考えて行く必要があると思ふんです。

そうしますと、そうした方策を実現して行くのに必要な諸条件を「破壊」して行く政策なり動きなりが「破壊」の要因として考えられて行くわけで、そういう場合、スタンダードなものをどう考えるかというのが三つばかりあるんで、そのそれぞれが「破壊」に対して「破壊」されていない姿は何であるかということを究明する必要があると、私は思ふんです。たゞ、今そのスタンダードなものが具体的にどういうものかということを示すまでにはなっておりません。あと、一寸考えてみますと、村研で農家族とか農村家族といった問題、過剰人口や戦後農村の変貌をやったとき以来、しばらくとりあげていないんで、このさい「破壊」の問題との関連で、こうしたことを集中的に考えてみるのもいいんじゃないかと思ふます。

(後藤) 有難うございました。一寸、十分ほど休憩いたしますが、このあとはもう司会ということなしに自由に発言して頂きたいと思

います。

(二宮) 休憩前に話をうかがったり、また「研究通信」の九九・一〇〇号を読ませて頂いてわかったんですが、どうも今度のテーマをめぐって、島崎さん安原さんのような東京の研究者と東北勢の問題意識とはだいぶ違いがありそうだし、また関西の人たちの考え方も違いそうで、何か三者三様という感じがします。それはたとえば、東北の場合、庄内のような平場水田地帯があつて、そこでの生産力の上昇といった現実をみていることが反映しているのに対し、東京の方は資本主義のまっ只中で、体制の膝下でもうこれはどうにもならんという風に研究者が神経をとがらしているのが鋭く出てくるように思うんですが、こうした地域の環境的条件が研究者の頭脳にかなり影響してるんじゃないでしょうか。これにまた関西が加わって、このテーマについて三様の解釈とか立場とかいうものが明らかになれば意味が出てくるのではないか、少なくとも大会に参加する問題意識を作るための参考になると思います。

(安原) そういうことでもいいんじゃないでしょうか。ただ、とにかく「生活破壊」の問題をやるという提案者の強い希望があるのを勘案して頂きたいと思えます。もちろん、場合によってはまったく「生活破壊」という現実のない地域もありますし、また「生活破壊」といっても人によって力点に違いはありましようが、それぞれフィールドで得た経験でもって「生活破壊」を考えるのだという副題を念頭においてやって頂ければと考えています。実は昨年、労働科学研究所の井上さんにお話し頂いたとき、新しい耕運機などの

機械の採用によつて、これまでなかった機械災害が起り、それをどのように保障するかについてというようなことが問題になっているということをお聞きしました。私たちはどうも今までそういう問題にあまり関心持っていなかったんで、こうしたことを考える必要もあると思つたんですが、ただそれだけで村研として議論できる蓄積があるかといえ、どうもつていうことになります。まあ、だから東北でやっていたらいたような事例、あるいは関西での事例といったものが出てくれば、大会に向けての非常にいい収穫でないかと思えます。

(余田) はじめこのテーマをみてガチンと来たのは、「生活破壊」とは何かつていうことがやっぱりはっきりしないとね、村研の場合、大体調査にもとづいて報告するわけですから、どうやって調査して行つたらいいかっていうメドが立たないことです。たとえば公害なんかで村全部が駄目になるとか、農薬で身体を害するとかいうことでやるなら、まだ問題ははっきりとするんだけど、「生活破壊」ということばでは一体どういふことを現わそうとしているのか正直いつてわからんです。一般常識的にはわかるんですが、だけど議論するにあたってはやっぱりきちんと概念としておさえておかないとどうにもならんですね。それで島崎さんのいつてるところを最初に分析的に整理してみたんです。ただ、さっきの話にもありましたように、生産力の伸びたことがかえつて「生活破壊」になっているという場合もあるし、「生活破壊」という概念の構造というものははっきりしないといけませんね。おそらく、このままやたらどうしようもない、大変報告しにくいものになつてしましますでしようなあ。「生

「生活破壊」っていうのは、ある意味ですつと過去から、そう農民の生活の自給段階からあるわけで、それを「破壊」とみるか「変化」とみるのかということがあると思います。ただ、「変化」と「破壊」という概念を対置してみると、「変化」でなくて「破壊」という場合、一体何を意味しているかということが明確でないと困りますね。その「変化」ということで行けば、東北でも問題になったように、たとえば所得水準とか消費水準とかということも出てくるんですけど、「破壊」という場合、それがどこまで来れば「破壊」ということになるのかということも出てくると思います。今年の共通課題として決定された主題と副題とはある意味で矛盾してると思うんです。「変化」といってにおいて、「生活破壊」っていうのがあるでしょう。「変化」と「生活破壊」とは同じなのかといえるし、また「生活破壊」というからにはやっぱり変化と違うんだろうっていう概念が頭にあるんですよ。だから「生活破壊」とは何かということを、もう一寸はつきりさせないといけませんね。

(川越) 「生活破壊」っていうことばはかなり価値評価の入ったことばなんです。また公害とか農業はたしかに農民を「破壊」してると思うんですよ。しかし、そうしたフィジカルな問題をわれわれはとりあげられるかっていうんですよ。むしろ、それはネグった方がすつきりしていいんじゃないでしょうか。公害とか農業とか機械災害の問題は重要だと思えますが、これまで含めてしまったら論点がますます曖昧模糊なものになってしまわないですか。

(余田) いまいわれたことに関連しますが、水島の場合、柿崎さ

んのやってるのなんかは、はっきり「生活破壊」っていうことになってくるでしょう。たゞ、ああいう場合だけでいいのかどうか。私なんかやってる例では、いろんな変化は出て来ておりますし、農民の生産と生活とが段々分れてくるということがあり、それが家族にいろいろ影響して来てるっていうことはあります。それで家族の形態からいえば、いわゆる家的な構成から核家族の連合体みたいなものになって来ているということはいえますが、そこからいきなり「生活破壊」ということにつながらぬと思います。

(川越) 島崎さんのいっておられる「生活破壊」というのは、独占資本主義の段階のそれといった限定をしてるんじゃないでしょうか。

(安原) あまり立ち入った話を東京でもしていませんのでよくわかりませんが、場合によって島崎さんに一つ課題のポチティブな展開を研究会でして貰おうかと思っております。まあ島崎さんの場合、素材として念頭にあるのは一つは安中なんです。その前に鹿島なんかをみたこともありますが、とにかくそうしななかで農業をやろうというたくましいエネルギーを感じさせる農民は身近にいなくなってます。やろうという連中はまたバラバラで自分だけは何とかやって行こうとしているけれど、果して続くんだろうかっていう不安を感じさせるんで、そういう状況を現在、村のことをやっている研究者がちゃんと把握すべきなんだという気持が島崎さんにあるんだと思います。安中なんかではもうああいう公害がはっきり表立って出て来ていきますし、また鹿島なんかで実際に移転をして代替地にスプリンクラーなんかすえつけて貰って、そういう畑でピーマンを栽培

している農家なんかがあるんですが、行ってみるとおやじさん夫婦だけは農業やっているけど、息子はタクシーの運転手やって、そのうち段々やめて行って貸家かなんかやるということになってしまわざるをえない状況になっていることが問題なんですね。今、現実にはピーマンなんか作っても先に続く可能性が見出せないということですね。こんなことをみようというのが鳥崎さんの趣旨じゃないのでしょうか。憶測になるかも知れませんが、私の印象ではそういう気がします。

(川越) 安原さんがさっきいわれたように、農民生活論あるいは農民生活構造論というのを村研で部分的にはともかく十分きちんとやったことがないわけで、そういうなかでいきなり“生活破壊”といってもどうもつかまえないですね。“変化”といっても昔と今がどう違うかというとき、その昔がちっともやられていないんじゃないんですか。ぼくはそのフィジカルな面は、なるべく除いた方がいいということが一つ頭ん中にあるんですけれどね。

(安原) そのフィジカルな面については、この前の合同委員会で中野卓さんから出まして、“生活破壊”というのが肉体破壊・健康破壊ということだと、なかなか村研のメンバーじゃやれないだろうということだったんですが、そのときまたまキュウリの話が出て、鮑を出すキュウリっていうのは、食べるのももちろん危険だけど、作ってる方ももちろん危険なんですね。ただ、そういうのフィジカルな面からとりあげるとは難しいけど、しかし、そういうキュウリを作らなくちゃいけないという状況をとりあげるとはある

程度できるだろうと思います。そうすると、もちろん、“生活破壊”ということに直接つながらないんです。媒介されているわけですか。しかし、村研のメンバーでとりくむとすれば、こういう角度からかなという話が出ました。あるいは機械なんかを使ってやって怪我やいろいろな問題が出ているけれども、しかし機械を使わなきゃれないという状況なんかもあるんで、こうしたものを生産力の前進ということで評価はできないんじゃないかということを、ソーシャルなものとして考えて行くことは出来るだろうということも話されました。しかし、それにしてもさっき川越さんのおっしゃったことと関連するんですが、一体どうなのがバランスのとれた生活なのかというのがわからないと議論を展開することが難しいですね。

(余田) どういうレベルで問題にするのかを明確にしておかないと、議論が拡散するおそれがありますわ。たとえば兼業化の問題でも関西では一町五反ぐらいやってる層がそれだけの収入では三ヶ月しかもたんのので、あとの生活費を農業以外から稼ぐっていう現実があるんです。裏作をやればといっても、損ばかり行って全然駄目だから、やはり農外ということにならざるをえないんです。農家が昔のように表を作らない問題にしてもこれは外国の麦との関係があるんで、兼業化しなくちゃならないということも麦の値段が安いからということになれば、外国貿易とのからみで考えなくちゃならなくなってくるんです。こういうように問題は際限なく広がってしまいます。だから、問題をどっかで限定しておく必要があります。さっきの肉体的な問題も農村の問題からどっかへ行ってしまうというこ

とも起ると思います。

(二宮) 私は「生活破壊」ということばをお聞きして感じたことが二つあるんですが、一つは「生活破壊」といった場合、農民の立場に立てば再構築・再組織あるいは開発といった問題と同時に取り扱わないと、農民とともに農村・農業問題と取り組んでいる者としては片手落ではないかということです。おそらく「生活破壊」というのが最初出て来たのは、一方で資本主義が高次に発達し、その部分がどんどん構築されていったのに対し、農村はその影響で衰微して、ついにデストロイされてしまう、つまり公害とか貧困で農村がズタズタにされてしまって農村が立ち上れない状態、もはや農村でも人間の社会でもなくなるような状態というものに視点を置いて実態を直視すると、岩本さんの一〇〇号であげている山形県の集落移転も「破壊」じゃないかというように見えてくるし、出稼ぎに能登半島あたりから沢山行っているのも「破壊」じゃないかということになると思うんです。しかし、これを社会変動という視点に立つてみると、原型があつてそれが解体したとか、あるいは以前はこういう様式であつたけど今度はこういう様式になってきたとか、あるいは古いものが新しいものに変つたとかいうことになつたんですが、ここに「破壊」という観点を入れて見直すと、我々の目に一番よくみえてくるのは、さつき余田先生が例として出された水鳥の公害にあつたような農村、死に絶えてしまつたような農村なんです。そこに立って見直すと、あとの農村の変化とか解体とかいわれている現象だつて全部破壊じゃないかというようにみえてくるんです。それが

「生活破壊」というテーマの出て来た理由であつて、あるいはそこまで問題意識を先鋭化して行かないと、もう日本の農村は扱えられない、あるいは再生できなくなつていくということで、この「生活破壊」というかなり価値的なニュアンスのあることばが出て来たんじゃないかと思ひます。そこで僕がいたいのは、それだけに農民の立場に立つていうと、研究者やなんか破壊されてる、破壊されてる、これもそうだ、今まで変化つていくことばでいわれていただけで、これだつて破壊だぞということ指摘してくれただけでは困るんで、破壊されたといわれている当の農民がわれわれの生活はどうしてくれらんだということ、はつきりいわなくちゃならないと思うんです。そうでなければ農民は困るんで、そういう方向を示してくれないような研究じゃ實際役に立たないんです。だから、我々が「破壊」といった問題を研究者として取り扱う場合は、農民とともに再構築・再組織あるいは開発をどのようにしてやって新しい農村を建築すべきかという視点を加えないと片手落だと思ひわけです。それから第二点は、問題意識をそこまで突きつめて考えると、やっぱり生命の問題をとりあげないと、すつきりして来ないんじゃないかと思うんですが、たとえば農村の生活が「破壊」されているというのを、何とかしなくちゃいかん、あるいはこれをみようといった場合に、農民自身あるいは農業・農村の研究者だったら、そらそうだということになります。ところが、他の人が聞いた場合、なぜですかということになつてしまふと思ひますが、そのときは農村生活の「破壊」は困るんだということばだけで説得できるかどうか、農

民の生活とわれたっていいじゃないですか、農村がすべて都市になったらいいじゃないですか、なぜ悪いですか、農村だけが「破壊」されたらいけないんですが、都市はどうなんですかっていわれたら、どうも何ともいえないと思います。もし外国の人なんかから、日本の社会学者っていうのは、農民生活の「破壊」とか、農村生活の「破壊」とかいうテーマで学会を開いているが、なぜそんなことを日本でやるのかといわれたとき、説得性のある答えができないんじゃないでしょうか。だとすれば、やはり生命という根底の問題にまで立ち入って行かなければならないと思います。農村・農業というのは食糧問題に直接関係しておりますし、また、自然に関係しているわけですからね。だから「生活破壊」を問題にして行く場合には、結局、人間が人間らしく生命を維持して行くために、という視点を失ってはならないと思います。それは健康維持ということにもなりますけど、もっと人間と自然とか、人間が生活して行く上での地域社会としての農村と都市とかという風な問題にもなってくると思います。

(岩崎) 私は別に関西で長い間の研究の蓄積があるわけでもないんで、逆に現代的なところには目が行かないんですが、そういう意味で鳥崎さんの提案なんか積極的に受けとめるんですけれども、いままでの議論を聞いていると、私の鳥崎さんの提案の受けとめでは必ずしもエコロジカルな面とか、人間・生命の危機に重点があるというよりも、やっぱり今日の独占資本主義のもとでの「農業破壊」というか「生産力の破壊」というものが、その主要な担い手の単位

である農民生活そのものの危機的な状況を生んでいるという認識が軸にあるんだと思うんで、「生活破壊」という概念的な問題は余田先生も非常に曖昧なものであると指摘されているんですが、実際、我々が現実を素直にみた場合には、そこに「破壊」というとすぐ解体とか消滅とかいうことに固定化してしまいがちだけれども、今の農業経営・生産というものが先行きどうにもならないような状況になっていて、そういう実態を反映して兼業化が進んでおるといってとってみると、たとえそれがそのまま解体・消滅ではないにしても、「破壊」的な、あるいは危機的な状況が生活のなかにあるということだけはいえると思います。そういう現実の常識的な認識というレベルで「生活破壊」の定義を受けとめるのが積極的だと思えます。生活というものが何かこうスタンダードなものがあるって、それが「破壊」しているというとらえ方も重要だと思えますが、あまり「生活破壊」という概念を確定しなければならぬということにとらわれない方がいいのではないのでしょうか。提案の趣旨はもっと広いところにあるんじゃないでしょうか。

(中田) 「生活破壊」の中味をどうするかという点を具体的に厳密に考え始めると、ずっと広がってしまうことになるんですが、その前に鳥崎さんの提案にある「資本による農業破壊が誰の目にもおおいがたいものとなった」といういい方が自体がかなり大雑把なものだと思います。農民の「生活破壊」にいたる要因というのは、きっとその間にいくつもあるわけで、直接、資本が「農業破壊」している事例ももちろんありますが、実際の「破壊」の過程というのは

もつというんな段階があるわけで、そのなかには農民の利益になるようにみせかけながら実際には資本の利益であって、結果として

“農業破壊”であるという場合も少なくありません。それが一見生産力の発展という形をとりながら、実際そうではないということがあります。過剰投資なんていうのは、まさに一見農業の機械化が進むようにみえて、実際には資本のおさめる利益が中心になってのことであるし、それからお金を貸して規模の拡大をやらせるときでも今の体制のなかでは金融機関がもうけるための手段として行なわれているにすぎないんです。しかし、これも農民側からみれば、自分たちの利益になる、発展になると思ってるんですが、結果としてはそうならないという現実なんです。だから“破壊”というものの現われ方、現状で一見“破壊”でないようにみえてるなかを貫いている資本の論理といったものをどうとらえるかという客観的なレベルの問題と、島崎さんがそれに対してなぜ農民側の生活擁護の斗いが起らないかという農民の意識の問題とはかなりズレているわけです。しかし、とくにこの間接的な資本による支配という場合には、むしろ意識との間にズレのあることが前提になっているわけですから、その辺のところをあまり簡単に結びつけようとして現状のとらえ方が実態とズレている、そこでどう再構築するかということがあつさり行なわれすぎると、かえって問題がわからなくなると思います。そのなかで農村自治論というものが出てくるわけですが、間接的に一見農民の利益をふまえたようにしながら出てくる偽装的な農民の生活の再編成や村の再編成、コミュニティ作りという

ものもあるわけです。もちろん、現状で今の“破壊”された状況に対応して行くためには、単に反対運動的なものじゃすまないんで、新しく村づくり町づくりということが必要になってるんですが、その場合に作るという積極的な面の提起が単に否定的なものに對置されただけの段階に留まっているのが政策的に出てくるコミュニティ論なんで、その場合には何が“破壊”をもたらしたかという視点は抜きにされてしまつて、ただ一緒にやって行きましょうという共同利益みたいなどころから発想されてくるわけです。農村自治論というのは、もちろんそれとは違うわけで、現状、つまり“破壊”の実態をのりこえて、どのように構築して行くかという課題を持つているわけです。そのようななかでさまざまな形態をとって進められている資本の農村支配と、これもまたさまざまな形態をとって行なわれている上からの村の再編成、それに対する下からの自治的な運動があるというのを、かなり総合的に問題にするという意識がこのテーマのなかにかめられているんじゃないかと思えます。もちろん、それを扱う場合には局部的なことしか出来ないかも知れないけれども、現在ある問題点というのはいろいろあげるのではないかと思えます。

(二宮) もう一つだけ一寸角度が違ってくるんですが、つけ加えて下さい。“生活破壊”を考える場合、島崎さんは、「課題の発達は、“村は生きている”という発見・回想にあるのではなく」といってますが、そういう“村は生きている”という事例は案外農村地帯の研究者からは多く出てくるんじゃないでしょうか。このテ

マに対する批判的な立場というか、別個の解釈の仕方が出されて、大会の席上において「破壊」されている、いやいなといった次元での討論が出てくるんじゃないでしょうか。

(後藤) たしかにまだ「むら」という枠組で検討するという問題はあるんじゃないかという意識はありますね。

(二宮) もう一ついいますと、「むら」は「破壊」さすべきでない、「むら」を「破壊」させるということなどをテーマにあげるとは何かとか、「むら」は決して「破壊」ささるべきでないし、また我々はそういうことはすべきでないし、農民とともにそういうことを考えるべきでないだという気持があります。この、「べきでない」というとき、中立科学的な学者の立場でそのことを明らかにしようということもありましょうし、実践的に住民運動のレベルで農民と一緒にあって「破壊」すべきでないという理念を主張するということもありましょう。立場はいろいろでしょうが、こういうテーマを与えられたとき、そういうことはすべきでないというように打って出る研究者もあるでしょう。となると、提案者の意向とかなりズレたというよりも、まったく別の立場で問題が展開されるんじゃないですか。

(余田) 今のことに関係してというと、伝統的な枠組みとか、スタンダードな農民の生活は何だったのかという問題を一般的に出すと、たしかにそういうような議論も出てくると思います。むしろ後向きに、あるべき農民の姿はこういうもので、それが「破壊」されているなら、もとに戻すべきだという発想もあると思いますよね。だか

らどう筋で議論を進めて行くかということをしきんとすることが大事だと思います。それにもかかわらず、島崎さんが伝統的な生活枠組みといったことをいっておられますが、伝統的な生活は何かというのには内容によって非常に問題があります。悪くとると、前近代と近代とに分けて、前近代から近代へということでもみて、駄目だからもとへ戻せということにもなるわけですが、そういうことになってはいけませんね。だから、むしろそういう風な発想ではなくて農民生活というのはたえず変っているんだが、「生活破壊」というのはそうした「変化」のどういう段階で起きているのかということがはっきり意識されなければいけないと思います。それは要するに高度成長にもなって起った農村の急激な変化ということだと思ふんで、問題はとにかくそういう風にとらえてそれに伴って各地に起っている「むら」の問題点を出して行くようにすべきだと思ひます。場合によっては階層性、階級性もあるわけだ、経営としてどんどん伸びているものもあるし、あるいは両極分解で下層に行っているものもあるわけで、それぞれによって問題点もまた違ってくると思います。各地での問題をとにかく出して展開するのがやりやすいと思います。「生活破壊」というと何かにそれにとらわれて、何がそれということ、私自体、最初にそういう問題の立て方やったんですが、そういうことになってしまふんですね。

(後藤) やっぱ「生活破壊」という概念をいろいろ問題にするのと、どうにもとらえにくい点があるんで、「変化」ということばのなかにたしかに「破壊」的なものがあるわけですけど、それも同じメ

カニズムから出てくるもののある部分、あるいはそれがあつた程度まで行つたときのこと、まあどつかに境界があるんでしようけど、それを「破壊」ととらえることになるわけだと思います。島崎さんは安中あたりの問題や事例を意識されて「破壊」ということばを出されたのだと思いますが、岩本さんが報告された安孫子さんによる合同委員会での討論のまとめではかなりの修正がなされておられると思います。しかし、われわれ「生活破壊」ということばにどうしてもとらわれて議論を重ねて来ざるをえなかつたですね。

(安原) まあ、たしかに「生活破壊」の事例というのは、安中のようなところに一番露呈されている事態なんですね。まあ、他でも安中ほどでなくてもいろいろあると思うんですが、とにかく露呈されている部分をはっきりさせることで、現在の状況を一番つかむことができるだろうというのが島崎さんの考えなんだと思います。その意味で、実際にいま農業やつてる農民たちにも一体これからどうなるんだらうっていう危機意識があるなかでとらえて行かないとならないわけで、「破壊」が露呈されている事態だけを「破壊」としてとりあげるだけでなく、実際に「破壊」として目に映らなくとも、そうしたものがあつたという目で見なければならぬだろうという考え方があるのだと思います。私も個人的にはそうした方法をとる必要があると思つてます。ただ、村研全体から考えた場合、そういう意味での最も端的に予定されている場面だけで報告を組んだりすることはまず不可能だろうが、そうでない場合の事例の報告があつたようなときに、それが島崎さんのいう「破壊」の状況と

どうかかわつているのかという議論はできると思ひます。そういう意味では「破壊」とは何かという概念を確定してはじめることはしにくいし、またそういう性格のものでもないと思ひます。自分の調査している事例で、どうしても「破壊」とはいえないものがあるという報告でもいいわけで、その場合に一方に島崎さんのいわれるような「破壊」の現実があるんだということだけを知つておいて議論して頂ければいいと思ひます。そこで議論が喰ひ違えば、具体的な事例に則してなぜそうした違いが出るのかを明らかにすればいいんで、そこに村研のメリットがあると思ひます。例えば集落再編成なんかでも「破壊」という風に見えるべきだという議論もあるでしょうし、いやそうじゃないんだっていう考えもありましよう。また、岩本さんなんか批判する再版農本主義にしてもそれだつていいじゃないかという議論も出ますよ。とにかく「破壊」とみるか、「変化」とみるか、農村・農民・農業の現実が動いていることだけは事実なんですから。

(松本) 「変化」と「破壊」とは確かに違うんですけど、その「変化」を論ずるなかで、その本質が「破壊」かどうかということとで共通認識が深まればいいんですね。

(後藤) 私も島崎さんの提言や東北での座談会を読んで、一番印象に残つたのは、「生活破壊」をどうとらえるかということ、それを特殊現代的形態として考えるのか、戦前の資本主義においても違った形でみられるのかということと議論が分かれると思ひます。もし戦前にもあるとすれば、その形態と戦後の現在において現われ

る形態とを比較してということになりましうし、戦前にはそういうカテゴリーは適用できなくて、戦後だけということなら、むしろ現状の細かいとりあげを大会で行なって次第に集約して行く方向をとったらいんじゃないでしょうか。極端的な状態で「生活破壊」という問題が出て来ることはわかりますね。私も三月末に別子鉱山とか新居浜の方に一寸行きまして、農業がやれなくて耕地が荒廃して放置されている状況とか、公害でもって地表で作る西瓜とかトマトとかができなくなつて、大根とか牛蒡のような地下に根を張る奴だけがまあまあといった有様をみました。そこではビニール・ハウスを作つて農業やつてゐるという農民もありましたが、多くは兼業、あるいは主婦労働ということになつてゐるようです。しかし、別子銅山が廃山になつて、住友が撤収した結果、そのあとの生活が村の人の意識では村が続いているということになりまして、住友がいたときには住友に荒らされて荒廃していたけれど、出て行ったら村的なものが回復したという発想もあるんですね。それからスタンダードな農民像というのとかからむんですが、それを一義的にみるのか、それとも自立できる農民、つまり再生産して行ける農民というものにも諸形態があると思うんですね。戦前段階において可能な場合とか戦後段階において可能な場合とかね。はじめから概念的、一義的にやつていたんでは、とても先に進まないんじゃないですか。

(二宮) 「生活破壊」ということばを使うのは、それはそれでもいいし、そういうテーマを追求するのも悪くはないと思うんですが、現時点で農民生活の「破壊」といったところに立ちいたった現象を

科学的に分析したりするにあつて、直接的間接的にでも農民を鼓舞できるようなアプローチの仕方でないという意味がはいんじゃないかと思つてゐるんです。たとえば私が農村に行つて話をするとき、都市は発達しているが農村は段々崩壊しつつあるということになると、農村の人たちはそうした主張を他でも雑誌やなんかで読んでますから、話が終ると、自分は一町歩の田畑を持つてゐるけど、いまそれを売つて百姓をやめた方がいいでしょうか、といった質問するんですね。農民にそんな気持を起させるような分析、主張ではやっぱりいけないんで、私も村研で農村生活の「破壊」ということを科学的に追求して行く場合に、そこから農村の人が新しい意欲をもつて歩いて行けるようなものを感じとるような方向でないといけないと思います。たとえば「破壊」というところに行く一歩手前の「変化」とか「解体」という状況にある村において、農民も役場の人もどうしようもなく頭を抱えているというところへ行つて話をするとときに、私がこの前どこそこに行つてこういう村をみました、ここでは非常に村がうまくいつてゐる、発展しているというようなことを話してやると、非常に参考になるわけで、話を聞くことで生き生きしてくるということもあるわけで、そこから再建とか再組織化ということが出てくるわけですから、そういうものがないといけないと思つてゐるんです。岩本さんの一〇〇号で話している集落移転の例などは、いま「破壊」されつくされようとしてゐる村に行つて話してやると、そこから自分たちの立ち上るサンプルなりイメージなりを村の人たちが見つけだせると思つてゐるんです。極端な「破壊」の

なかでとにかく農民を鼓舞できるという要素を発見できるという方法でもよいし、そこまで行かなくとも、うまく行っている農村、村は生きているという例を明らかにできれば、農民に明日からまたやって行けるという自信を与えることになります。その意味で、私は農民生活の「破壊」というテーマでいいけど、そういうことへの展望がない限り、現時点ではちょっと村の人に悪いんじゃないかという気がしているんです。

(余田) おっしゃるような意味でいいますと、低成長に移って、そのために都会に行っても仕事がない、いままでも出稼ぎなんかで補ってきたけれども、それがなくなってしまうというような向きもあるんで、そういうことを討議する必要もありましようね。ただ実態調査ということになると、そこまでは難しいでしょうね。農民の側からいえば、高度成長下において米は作るなどか何とかいわれども、労働力の吸引があったからほとんど出て行って、何とかバランスをとってきたんですけど、今度は働きに行くにも口がないというところで、どうしたらいいかっていうのはずいぶんあるでしょうね。

(岩本) 私のように歴史をやっている者からいうと、農民に對しようこうという政策的な寄与というのは非常にやりにくいし、むしろしない方がいい、やれる能力がないと考えているわけなんです。今一寸二宮さんから私のあげた集落移転の事例が、「破壊」の状況にある村の農民を鼓舞するのに使えるという風にいわれたのもっとも実情をはっきりさせておきます。私自身はこの山形県で行なわれている集落移転というのは非常にネガティブにしかみてません。なぜ

あれをやったかといえますと、高度経済成長下で人口がどんどん出て行く、そうすれば行政区としての村、実は町なんです、その人口が減ってしまうというんで、町の中心から遠く離れているような人たちに対し、町の中心に団地を作って迎え入れて、そこに工場を誘引して、その労働力を使おうということをやったんです。そして、それをいわば強行するために、行政で面倒の見れるところはこまめというように線引きして、そこから奥はおいてこいたといったのが山形でいくつも行なわれた集落移転の実情なんです。ところが中心部に移って来ても、いまのような不況になって来て、あるいは高度成長のときでもそんな山の中の町まで工場が来たかどうかもわからんですが、予定された工場も開かれないから、結局、働く場所というところ、遠い人では二〇キロも離れたところに自動車で出かけて通勤耕作をやるしかないんです。そして、冬になったら、やっぱり今まで通り出稼ぎに行くということ考えているんです。そうすれば山の中にいたときと全然変らない、むしろ田畑に通勤の時間だけ余計かかってしまうということになってるんですね。とてもよその農民を鼓舞するどころか、ますます情なくなるんじゃないですかね。だから、私はそれを山形での「生活破壊」の事例としてあげてるんです。移植して持って来ても根つくか根つかないか、もしくはと根つかないんじゃないかという状況なんです。ただ、行政から見れば、町人口がトータルとして当面減らなかつたというだけじゃないですか。

(二宮) そうですね。それはどうも逆の例だったですね。しかし

私ら後継者の残る農村や農家の話を村に行つてしてあげると非常に喜ばれ、参考にして貰えます。だから、壊れてる壊れてる、これも駄目だあそこも駄目だといって、日本の農村はもうどこも駄目だというの、冷厳な科学の分析だから、それはそれで学者や社会運動をやる人の材料にはなるかも知れないけど、現在の行き詰った農民にそうした事例を示すと落胆して農業をやめてしまうということになってしまいます。今度の「生活破壊」の問題も研究者だけの会だから、「破壊」の現状を冷厳に示すというのも意義が深いと思いがすが、農民の顔を思いうかべると、これからの農民の将来に希望を持たせることができるような要素を持ちこんで扱わなければならぬと思います。

(岩本) 私はむしろその二宮先生のいつているいい例というのにも問題があると思うんです。そのいい例というのを、いわゆるいい例として取り出して話してやれば、農民に希望を与えてやることのできるというやり方には、私は危惧の念を持ちますね。我々としては現実をつかまえることはできますが、しかし、その現実をつかまえて出て来たのを持って行って、ああしなさい、こうしなさいというのを私の能力ではいえないですね。そうすることが、また将来において農業を「破壊」させるということになってしまいかも知れませんが、そういう意味で、我々は具体的に現実をみることにだけに当面留まるべきで、どのような政策立案ができるかといったようなことには必要はないんでないでしょうか。とても一、二年の学会の議論ぐらいでは、そんなことおそろしくはいえないですよ。

まあ、私自身、歴史を専門にすることから、どうしても現状をやる人にくらべれば、現実離れしたところからスタートするんじゃないでしょうか。

(二宮) 私のいいたいのは、政策立案とかいい例を示せというような表面的なことをいつているんじゃないんで、「破壊」というものを徹底的に追いつめて行く過程で、何か新しい展望を出すようなことが必要だと思つてゐるんです。安原先生が一〇〇号でいわれている弁証法的なということが、何か私のいつてるのと同じではないかと思つてゐるんですが。

(安原) 私なんかみてゐるところでも、実際に「破壊」なんていうことが露呈されていないから自信持つてやつてゐるのかというと、必死になつてあれこれ考へてるわけですね。もちろん私たちはあんまりアドヴァイスなんてできないわけですよ。ある開拓の村に行つてみると、いままでも豚飼つていたけど、今度は牛を飼おうと思つてゐるが、牛を飼えばあたるだろうか、豚はもう本当に駄目なんだろうかといわれましてね。だけど、これをやつたらいいつていうだろうつてことはなかなかいえないですね。あるところで、よくいつてゐるつていうのがあつても、それをとりまく条件がありましようし、たまたま政策的なものに支えられてゐることもありましようしね。だけど、もちろん「破壊」されればなしでいつていうんでなくて、一生懸命農業をやつて行きたいというものに対しては、価値判断は入るけど何か相談にのつてやるつていうか、そういう場合にはこういうポリシーがあるからこうなる、ああいうポリシーだからこうな

ったということははっきりさせて上でやらないと駄目だと思えますね。たゞ個人的にそういうものへの対応はいろいろあるわけで、土地を売りたいという者がある場合、そういうのはけしからんじゃないかということはいえないと思います。とにかくあなたの問題としてお考えなきいということだけですね。これはこうだという決め手は持てないですね。

(余田) 居直っていえば資本主義の法則として農業と工業は分離して行って不均等発展して、農民層は分解して、一方は労働者になるんで、もう一方は富農になるんだから、それは歴史的な必然としていずれそうなるんだから、あんな選択しなさいというほかないね。月給取りになるんなら、子供に教育をつけさしていい就職できるようにすればいいだろうし、農業やりたいなら請負耕作でも何でもやるように努力しなさいというしかないね。具体的にどうしなさいっていえないもんね。さっきの議論に戻せば、「生活破壊」というのはとうぜん出てくるんで、生産と生活の分離なんていうことは何も騒ぐことがないんだが、ただそれが急激に起って来て対応し切れないようになってきているから問題なんですね。しかし、これは個別の農家や農民にとっては非常に大きな問題だから、そういつてますることが実際はできないんですね。それで急激な「破壊」っていうことは、単に急激というだけでなく、農民層分解のなかでそれぞれの経営主体の基幹労働力までも兼業化しなくてはならないという状況にあることが実は問題なんですね。今までも兼業っていうことはあったけれど、それは実は娘とか次三男とかの問題だったんです

ね。それがこの段階になって基幹労働力までが兼業化して労働者が農家かわからんような状況になってきて起っているさまざまな事態が農家の危機であり、農業の危機であり、「生活破壊」だということなんです。しかし、これは歴史的必然だということだけで放っておくわけには行かないんで、法則は法則で、法則がわかれば人間の知恵として対応の仕方を考えて行く必要があると思うんです。それをどうやるかっていうのが、要するにこのテーマで考えて行くことなんです。

(川越) 都会で週休二日制というのがある、そういうとき都会の人たちは何やってるんだしよかね。私はある村で、といつてももう新しいことでないし、細かい調査をやったことでもないんですが、役場につとめてる人がいて、朝九時頃から役場が始まるというんで、その前に農業やる、そして五時に役場が帰って帰ってまた二時間ぐらい農業をやる、それで結構八反ぐらいやってるわけですね。出荷なんかも荷車で行つたのが、今は自動車で行けるからそれほど時間もかかんないですませるんですよ。それでとにかく生活レベルはうんとあがったっていうんですね。だから、どうも兼業化せざるをえないっていうのも確かにその通りなんだろうけれど、一方でみると生活の多様性ということなんで、それで農業生産があがってるわけなんですよ。機械化なんかやってね、それは一種のオーバー・ワークだ、寿命を縮めるといっても平均寿命はまた伸びてるんだね。これを都会の週休二日制に目を移して、労働者がこの二日間

き、それが都会人の「生活破壊」なのかねっていう気がします。もちろん、基本的には間違いないと思うんですけど、ダイレクトにね「生活破壊」といってしまうことに私は抵抗感じますね。究極的には確かに「破壊」か何かにつながると思うんですけど、何かこの生活の多様性といった視点で考える必要があるんじゃないですか。もし、こうしたこと「破壊」っていうんなら、農業だけでなく人類全部が「破壊」っていうことになるんじゃないですか。

(岩本) その点なんですけど、農民にとっての「生活破壊」っていうのが資本による生産力発展をそのまま受け入れたということによって起っているとすれば、都市生活者もやっぱり日常的に「生活破壊」状況にあると認識する必要があるんですね。私たちは確かにこうやって「生活破壊」をテーマにとりあげると、自分たちもそうだっていうと思うんですけど、農村に入っていくときどうも自分たちは農民とは別だっという意識がどこかにありはしないか、あるいは実は農民ほどにもそんなことちっとも考えていないんじゃないかっていう気がするんです。だから、ひとごとみたいに農民の「生活破壊」なんていって、農村に起っている諸現象を指摘することができないんじゃないか、どうも農民の気持が本当にわかっていっているんじゃないんじゃないかって、こんなことと鳥崎さんには怒られるかも知れないけど、こういうテーマをやる限り、会員全体が農民や農村に対して他者として接するやり方ではないかと思うのというわけです。実際に村に行ってみて、田植機が入り、稲刈機が入って時間に余裕ができたから、もっと働くことができるか、もっているのを、

そらオーバー・ワークだ、「生活破壊」の事例があったって報告するのは簡単ですよ。しかし、現実に機械が入ったってことで、作業が楽になったといったら喜んでる農民の気持をどうしますか。機械をやめて手で稲を植える、鎌で刈れていることいえますか。そんなこといったら、おそらく塩でもまかれて追い返されちゃいますよ。追い返されるのはいいですよ。しかし、そういうことをいくなり農民にいうのは同情も何もない話ですね。その辺の農民の心情をもっとつかんだ上でこのテーマを扱って行かないと、どうも農民の感覚とは非常に離れたところで「破壊」論ができあがるという気がするし、今までも農民の意識とは無関係な発想をいっているときに何回かやってるわけですね。そういうとき実際に村の人たちに受け入れられないで、結局は「農民の意識は低い」なんていって退脚してきたわけですが、そんなことしたって何にもならないという気持が私には非常に強いんです。私の育った相馬の農家の人たち、親戚もあれば同級生もいるんですけど、そうした人たちが一番望ましいと思ってる生活像は、喰い扶持をとるだけの田畑を持っていて、亭主が学校の先生か市役所か鉄道か郵便局あたりにつとめて定収入のあるということなんです。日曜農家っていうか、日常的には母ちゃん農業ですが、そういう家が大変うらやましがられてんですね。村でも一番早く機械も入れるし、生活レベルも高いということ、こういう人たちつかまえて、お前んところは「生活破壊」だなんていって説得力ないですよ。どうも私は何か具体的な農民を考えようとするとき、すぐ彼らのことが頭に浮かぶんですね。彼らはとに

かく経営面積を無理して増やすっていうんでなく、まあ一町歩前後でいいっていうことなんですね。農業所得だけでやって行ける経営なんて毛頭考えていないし、今どきそんなことがあるとも思っていないんじゃないですか。それとも一つ、これから「生活破壊」が起ろうとするところで、たとえば山形県の酒田のように大きい港が建設され、工場地帯の形成がもくろまれたところの話ですが、最近ではそうした計画が噂にでも出ると、もう鹿島なんかの例もあるからワートと反対の声があります。そして、相当広範囲に反対運動が組織されてくるんですが、いよいよ線引きが始まって、ここまでは引かかると、ここから先は引かからないということがはっきりすると、関係のなくなった部分は離脱するし、あるいはかえって直接悪影響の出ないと思われる範囲で接近してるところでは地価の値上りのような依存効果を期待して積極的に推進する方にまわってしまふということになってます。これは農民のエゴイズムといえましょうが、果して農民だけのものといえるとは限らないとも思うんです。しかし、とにかく農民というものを我々の観念で考えて、こうしてやったらと思ってやってやったとしても、彼らは彼らなりの価値判断で動くんです。農民とは決して馬鹿ではないんで、我々が何かしてやれると思ってるとしたら、思い上りもいところなんです。だから、今回のテーマでも我々の眼に「生活破壊」と映る諸現象をとりあげ、とにかく問題にすることは必要ですが、そこからすぐ性急に政策立案といった方向に突っ走ることはいらない方がいいと思いますし、またできもしないと思います。

(二宮)

今まで皆さんの話をうかがっていて気づいたことは、テーマは農民生活の「破壊」ということでもいいと思うんですが、その接近の仕方が一つは一般的なフレーム・ワークを明らかにし、それを訂正したり精密化したりすることであり、もう一つは岩本さんのいうように農民の現実に対応した形で取り扱うこと、川越先生がいわれる多様性をみながらの行き届いたアプローチということ、このお二人の先生に私はまったく賛成なんです。それにもう一つ加えれば農民に展望を与える、鼓舞するという私の主張です。一つだけ農民の将来に希望を与える例をあげさせて頂くと、ある村で専業農家はもうほとんどなくなっている、全部が兼業化、しかもほとんどが第二種兼業になっている状況のなかで、村の人の話しを聞いたり、実態を分析したりしていると、出てくるのは、兼業化した、出稼ぎに行ったりという形で、ほとんど「破壊」面のことばかりです。ところが、そのような村でも必ず一軒か二軒はきちっとやっている農家があるんです。二町歩かそれ以上持っている者ですが、石川県の場合、そうした農家三千戸か四千戸をつかまえて、中核農家に指定しているわけです。それは専業農家できちっとやって行けるというものです。我々はその主人に、このようにまわりが兼業化や出稼ぎに行っている状況のなかで、専業としてきちっと農業をやっておられるが、あなたの立場からみて今後どんな村が作りたいたいかっていうことを聞くと、そうするとその人が即答しようとしません。何か新しい展望が出てくるんです。周囲は全部「破壊」されていくけれど、そこに新しい村が出てくる芽があるんです。「破壊」

の面だけを強調するだけでなく、必ずそこに新しい展望が出来るようなことをやる必要があると思います。古い共同体は全部崩壊したけれども、もしその中核農家の人たちが新しい共同組織体をイメージしているならば、そこから何か新しい展望が出るんじゃないでしょうか。こういう研究ができればいいんじゃないかというのが、私の考えです。

(余田) 宝塚市内の旧長尾村っていうのは、ほかの旧三ヶ村と違って、一九六五年から七五年にかけてむしろ專業農家が増えているんです。これはどういうところかというところと植木やっていると。また旧良元村というのも、これ住宅地帯になってるところなんです、やはりこのところ專業農家が増えて来てるんです。これは驚いたんですが、調べてみると、旧西谷村に出かけて行って牧場やってるんです。牛何十頭も飼ってね。まだ統計上、それが旧良元村の專業農家っていうことになるんです。それでこの旧西谷村っていうのは、昭和恐慌期に農村が困ったときにアイリス、ダリヤをやったと立直ったところです。だから「破壊」に対して農家がどう対応したかということによっても違ってくると思うんです。対応の仕方がユニークでうまく行くと、必ずしも「破壊」だけでなくて、村を建設するっていう方向にもなってくると思います。それは過疎の場合でも村の中でのように対応しているかによって、過疎化のあり方が違うわけで、過疎化によって困っているところもあるけれど、ちっとも困ってないという村もあるんで、そういうところで聞いてみると、やっぱりリーダーの問題があるんですね。そういう事例も知りたいですね。

(中田) これは余田先生が最初に強調された点だと思っんですが、「生活破壊」が媒介抜きに都市生活の「破壊」と同じレベルでやられるのではなしに、小生産の生産力「破壊」の意味をもって深刻化しているんだという確認をふまえてのそれだという認識は抜きに出来ないと思います。そういう点で今、農業に起っている生産力「破壊」というのは何かっていう視点が社会学の方ではつい抜けてしまっうんで、これまでやられて来なかったんでしょうが、その生産力があがっているという現象のなかで生態学の方でいう個体維持と種族維持という本来矛盾すべきでないものが矛盾しているということ、たとえば農業生産やってる土地そのものが反当収量があがっていること、この反面で実は駄目になって来ている、やがて農業に適しない土地になって行っているという客観的な変化があって、本質的には略奪的な農法になってきているということははっきりいえるんじゃないでしょうか。その生産力というとき、細谷先生は一〇〇号でもって農業の場合、生産力の中心は人だっかっておられますが、このもっと自然環境といったものが強調されなければいけないという気がするんです。例えば志摩なんかの漁村やって、過密みたいなものが生産力の発展のなかで助長されてくると、結局は漁場を駄目にしてしまうという経過をみますと、自然環境に対して生産がどのように対応しているかということ抜きにして、数量的にはかられるものでただ生産力の高さということはいえないと思うんです。そうなる、環境自体をどう高めて行くかということなしには農業の発展もありえないと思うんです。もう一つ、それに関連して、環境

というのは一定の広がりをもってくるわけで、個々の農家が独自に処理できるといった性格のものではないと思うんです。そこで農家間の協力が出てくると同時に、今の場合ですと農家と非農家の関係というものも出てくるわけで、東北の研究会でもいわれているように、従来、完結していた村が段々完結しにくくなって来て、とうぜん行政とぶつかるということになるんですが、この点はあるいは東北と関西や愛知あたりとの違いとも思うんですが、例えば名古屋の近郊農村なんかで、農業地帯の真ん中に住宅地ができ、その排水が農業用水に入っちゃうというとき、農家の方が住宅に文句をいに行くと、住宅の方ではいわれてもどうしようもないということなんだけど、いろいろ話し合っているなかで、住宅の方でも今まで農家のやっていた農業用水の溝さらいに参加するようになってるんで、さらってみると、自分たちがいかに汚いものを流しているかっていうことに気づいて、非農家の側も農業生産あるいはその地域の環境保全という点で考え直すということも出て来ているんですね。そういうなかで、自分たちの喰べてる米の問題やうまい野菜や果樹を作るのはどうしたらいいかっていうことを非農家の人が考えることにもなってくるんで、農業用水に排水をたれながすという住宅を作ったことは農業の「破壊」なんだけど、それをどう改善して行くかというなかで、新しい地域づくりも可能になってくると思います。

(岩本) この中田さんのいわれた事例は大変面白いんですが、何らかの解決の方法が模索できるというのは、結局、農家も個人だし、住宅も個人だと、個人対個人の問題としてだから、人間の問題とし

て新しい環境づくりという方向で解決が可能だと思っんです。しかし、そこに入って来たのが、個人の住宅ではなくて、資本の経営する工場で、そこがたれ流しをしたとなると、そういう風な解決にはならないんじゃないでしょうか。たれ流すものの性質にもよりますが、結局は工場を撤去させるか、住民が立退くかという形以外に……

(中田) まあ一律にどこでもというわけには行かないでしょうけれど、我々の視点としては、生産力というもの、あるいは「破壊」というものをみる場合、土地なり地域なりの見落してはならない、あるいはもっと強調されてもいいんじゃないかっていう気持があるもんですから……。私の場合、地域というのは生産に必要な土地と水とか、ということでも広く考えてますが……。

(余田) 私は、その場合、簡単にいえば村というのは農業者むけで構成されるものであるのに対し、地域っていうのは農業以外の人が入って来て形成される社会、地域社会とはそういうものと理解します。

(岩本) さきほど二宮さんのいわれたなかで、一寸あげ足をとるようになって申し訳けないんですが、「破壊」されきったような村のなかで、一軒二軒専業農家として非常によくやっている例があったっていうのは、まさしく分解の結果であって、その専業で残っている人たちに今後の新しい村をどうするかを尋ねられるのは一向に構わないと思いますけれど、たゞ専業農家一軒で実は村ができますかっていうことをいいたいですね。そこにおいて農業が行なわれているわけですから、そこは農業地域ではあるかも知れないけど、農村

とはとても呼べないと思います。それからもう一つ石川県でそういう専業農家を中核農家に指定したとのことです。これを模範農家にしてみな学べといったところで、実は誰しもそうしたことが出来ないなかで模範になったにすぎないわけだから、そういう事例から農業のいい面とか明るい面とかを強調し、他の者に希望を与えることになるという持って持たてまわすことは、少なくとも私の立場からはやれないですね。

(二宮) 誤解があるといけませんので、申し上げておきますが、石川県が中核農家を設定したのは、模範農家としてそれをサンプルにしろというわけで作ったのではないんです。むしろ、そんな余裕はないわけで、これ以上、農家がなくなった北陸農村は駄目になるという背水の陣において、一軒でも多く農家を残したいということで作ったんです。もちろん、その設定には私は関係しておりません。それから、これは私の問題ですが、その種の農家に行って、あなたはどんな村を作りたいんですか、あるいは作って欲しいんですか、近所づきあいはどうしたいんですか、それから共同組織はどんな風であったらいいんですか、ということを探るとき、農家だけで作れる村はという聞き方はしてないんで、近所に兼業農家があったら、そういう人たちとどういう関係を持ちたいかとか、一つの部落にまさに一軒しかなかったら、他部落のそういう人たちとどのように連帯して行政村とどのように対応して行くか、部落一軒しか農家がないというのは非常に極端な例ですが、とにかくそういう意味でどんな村を作りたいかということを知っているんです。

(岩本) またからむようでもよくないんですが、私はむしろ石川県がそうした農家をとにかく指定しなければならぬような農政を過去においてやってきたことに、「破産」の実態をまざまざみるべきで、行政の目からみてもそうしなければ農家がなくなってしまうということを生み出したプロセスを考察する方が意味があると思います。それやらずに今残っている指定農家に今後の村づくりはどうしますかって聞くのはどうも、何かそれ以前にやるべきではありませんか。

(松本) 私たちが農民にこうしなさいとか、こうすればその先にいいものがあるというようなことは、私としてはいえませんが、ただ農民がどのような形で模索して村をどうしたいかというようなことを考えているかということをやはり拾い上げて行くことは同時にやっ行って行く必要があると思うんです。ただ、それを一気に村の実態をつかまずに入ってやってしまうと、それが宙に浮いてしまいで、どうにもならなくなってくるんじゃないですか。だから、まず、その手続きとして、そういうものをきちっとおさえて、その中ではという形で模索を拾い上げていくことが大事でしょう。

(二宮) なるほど、わかりました。賛成です。松本先生が非常にいいことおっしゃって下さいました。それから私と岩本さんの考えていることはそれほど違っていないと思うんですが、とにかく今の松本先生の御意見を会員が体してテーマに取り組んで調査を進めて行けばいいんじゃないでしょうか。

(後藤) それでは時間も来ましたので、このあたりで。どうもご苦労様でした。

(文責・岩本)